

東京工業大学附属図書館

正会員 安 田 幸 一 君
正会員 竹 内 徹 君
正会員 鳴 海 雅 人 君
正会員 山 口 健 児 君
正会員 廣 野 雄 太 君

大学にとって図書館とは、「学び」の中心かつ「知の集積」の場であり、大学の“知の象徴”となる施設である。どのような図書館を建設するかは、大学における今後の教育の方向性を内外に表明することにもなる重要事項であろう。今後のあるべき図書館像を考えるに当たって、図書のデジタル化をどう想定するかは悩ましい課題である。古代より継承されてきた活字メディアが突如絶滅危惧種になるとは考えられないものの、デジタルメディアと活字メディアがどのような共存を果たしていくかを想定するのは容易ではない。大幅な機能変更が起こりえることは想定すべきであろう。

東京工業大学附属図書館は 2 つの基本方針に基づき計画された。一つは「世界最高の理工系総合大学」を目指すというビジョンを支えるために、研究者・学生が必要とする幅広い情報環境を整えること、一つは学習支援機能・レファレンス機能を充実し、人と情報が出会う図書館を実現することである。

建物は全く性質の異なる地下図書館棟と地上学習棟で構成されている。気温・湿度の変化が小さい地下階は図書の保存に適するとともに、落ち着きのある閲覧エリアとしても適していると言える。一方で閉鎖的、単調になりがちな地下空間を、より心地良い学びの場とするための様々な手法が施されている。中央閲覧エリアでは、三角形のトップライトから差し込む優しい自然光が、静寂で落ち着いた学習環境を醸し出している。低書架閲覧スペースではプレキャストコンクリート製の波形天井に巧みに間接照明が組み込まれ、柔らかい反射光が地下の閉塞感を払拭している。その他ドライエリアから自然光を取り込んだ学習スペース、ガラスで仕切られ会話が可能なリフレッシュルーム、パーティションで仕切られた教員のための調査・研究ブースなど機能に応じた多彩な空間が地下階に巧みに配置され、単調さを感じることは全くない。

対照的に地上階は、ガラスとソーラーパネルルーバーにより覆われた明るい学習スペースが、ピロティ上に浮かび上がっている。鉄骨ブレースによるスーパーフレームをデザイン要素とした外観は、理工系大学の知の象徴に相応しいダイナミックなものである。

大岡山キャンパスは谷口吉郎、清家清、篠原一男など歴代の建築家の作品群が並び、大岡山駅からそれらへつながるエリアは、学生だけでなく、近隣住民にも憩いの場として親しまれてきた。新図書館の床面積の大半を地下化することで地上に大きな広場をつくり、緑豊かなキャンパスと周辺地域とを結ぶ緑のネットワークが構築されている。

以上のように当建物は、社会性・文化性から見た地域環境への適合性、外部・内部空間における造形の独創性などの面で特に優れているものと考えられる。

よって、ここに日本建築学会作品選奨を贈るものである。